

推進期間：令和2年度～令和6年度

沖縄県学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトⅡ ～学びの質を高める授業改善・学校改善～

「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」の「3つの視点」と「5つの方策」を通して授業改善・学校改善を推進し、本県幼児児童生徒に「新たな時代をつくるために必要とされる資質・能力」を育むことを目指します。

子供の学びの姿



やってみたい
調べてみたい
解決したい



説明したい
質問したい
整理したい



もっと調べてみたい
～場面でもやってみたい
もっと考えたい

「3つの視点」と「5つの方策」

視点1
自己肯定感の高まり

方策1 日常化する
【質的授業改善】

視点2
学び・育ちの実感

方策2 そろえる
【組織的共通実践】

視点3
組織的な関わり

方策3 支える
【発達の支援】

方策4 見通す
【学校組織マネジメント】

方策5 つなぐ
【学校連携・地域連携】



令和5年4月
沖縄県教育委員会

〈ダイジェスト版〉

充実期
R4～R5

沖縄県学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトⅡ



目指す子供像

- 主体的な問いと自分なりの考えを持つ
- 他者との交流を通し、考えを広げ深める
- 学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ



「確かな学力」の
確実な育成を目指す

学びの質を高める 授業改善

目指す授業像

「問い」が生まれる授業

～他者と関わりながら、課題の解決に向かい「問い」が生まれる授業～

「問い」を持ち課題を追求し、他者との関わりを通して導き出しながら、さらに新たな「問い」へと向かう「深い学び」を体現する児童生徒の姿を目指す。

授業の基盤

授業における基本事項

支持的風土・学習環境

- タイムマネジメント
- めあて・まとめ・振り返り
- 発問
- 思考力・判断力・表現力等
- 評価・改善
- 板書・ノート・教具 (ICT)



視点

児童生徒が学びを自覚し、学び育ちを実感する取組を推進する

自己肯定感の高まり

学び・育ちの実感

組織的な関わり

児童生徒の姿を見取る「視点」を共有し、「フィードバック」を充実させるとともに、「振り返り」「個人内評価」等、児童生徒が学びを自覚できる取組の充実により、「学び・育ちの実感」を持たせる。

授業改善を支える

学びの質を高める 学校改善



支持的風土を醸成する学級、学校づくり

「安心」「所属」「承認」「自立」といった支持的風土づくりの4つのポイントを意識した学校改善を展開し、児童生徒の自立的な学びや育ちを支援し、キャリア形成を図っていく。

学びの質を高める5つの方策

- 1 (日常化) 質的授業改善
- 2 (そろえる) 組織的共通実践
- 3 (支える) 発達の支援
- 4 (見通す) 学校組織マネジメント
- 5 (つなぐ) 学校連携・地域連携

充実期における重点取組

重点1

自立した学習者の育成

- 取組1 「問い」を持ち、主体的に学ぶ授業の推進
- 取組2 自立して学ぶ児童生徒の育成に向けた「自学自習力」の育成
- 取組3 ICTの活用等による「個別最適な学び」の推進



重点2

中学校期の学力課題の改善

- 取組1 「特定の教科等（道徳科、特別活動、総合的な学習の時間など）の授業研究に全職員で取り組む組織的授業改善
- 取組2 児童生徒の成長を捉え、次の学びに生かすテスト改善

目 次

P・PⅡ「充実期」ダイジェスト	P 1
「充実期」における「重点事項」及び「具体的取組事項」	
1 重点事項と具体的取組事項	P 3
2 具体的取組事項の概要	P 3
3 義務教育課ポータルサイトの活用	P 4
学力向上推進施策策定にあたって	P 5
学力向上推進の取組の現状から（令和4年度基準値）	P 6
I 学力向上推進施策の基本的な考え方	
P・PⅡの位置付け	P 7
II 学力向上の全体構想	
1 学力向上推進における全体構想について	P 8
2 推進期間の設定について	P 9
3 学力向上推進の目標と学校診断的評価	P 10
(1) 長期目標	
(2) 総括目標	
(3) 学校診断的評価（学校アセスメント）	
(4) 成果指標	
III 学力向上推進の「3つの視点」	
1 「3つの視点」について ー授業の質的改善と学校改善ー	P 11
視点1 自己肯定感の高まり	
視点2 学び・育ちの実感	
視点3 組織的な関わり	
2 「学力向上推進の3つの視点」と「学習評価」の関連について	P 12
IV 学力向上推進プロジェクトⅡ	
1 学びの質を高める授業改善・学校改善の考え方	P 13
2 学びの質を高める「5つの方策」	P 14
方策1 日常化する（質的授業改善）	
方策2 そろえる（組織的共通実践）	
方策3 支える（発達の支援）	
方策4 見通す（学校組織マネジメント）	
方策5 つなぐ（学校連携・地域連携）	
V 本施策推進に向けた各機関の取組	
1 園・学校 2 家庭・地域 3 教育行政	P 17
VI 参考データ及び参考資料	P 18
□参考データ	
□参考資料 【授業デザインツール等】	

「充実期」における「重点事項」及び「具体的取組事項」

P・PⅡ「充実期」（令和4年～令和5年）においては、以下の「重点事項」及び「具体的取組事項」を設定し、推進する。

I 重点事項と具体的取組事項

重点1 自立した学習者の育成

本県児童生徒が自立した学習者として主体的に学習に取り組み、自分自身の力で学びを獲得するよう、学習観の転換を図りたい。

取組1 「問い」を持ち、主体的に学ぶ授業の推進

取組2 自立して学ぶ児童生徒の育成に向けた「自学自習力」の育成

取組3 ICTの活用等による「個別最適な学び」の推進

重点2 中学校期の学力課題の改善

中学校期の学力課題の克服に向け、以下の取組を推進する。

取組1 特定の教科等（道徳科、特別活動、総合的な学習の時間など）の授業研究に全職員で取り組む組織的授業改善

取組2 児童生徒の成長を捉え、次の学びに生かすテスト改善

2 具体的取組事項の概要

5つの具体的取組事項は、次頁の「自立した学習者の育成の図」の通り、互に関連し合っている。そのため、学校等においてこれらに取り組む際は、学校の状況に応じてその「切り口」となる取組を設定し、組織的な改善を図りながら次第に他の取組にも関連させ、波及効果や相乗効果が得られるよう発展させていくことが考えられる。

□「問い」を持ち、主体的に学ぶ授業の推進

児童生徒一人一人を「自立した学習者」として育成するため、学びに対する主体性をさらに高めたい。そこで、「『問い』を持ち、主体的に学ぶ授業」を推進し、問題解決への意欲と創造性にあふれ、児童生徒が「わかった!」「おもしろい!」と思えるような授業づくりを目指す。

□自立して学ぶ児童生徒の育成に向けた「自学自習力」の育成

学びに対する主体性を、児童生徒の学びの自立に繋ぎたい。そのために、児童生徒一人一人が「なりたい自分」や目標達成に向けて学び方や継続して努力する態度を育成するために、授業と家庭学習の往還した自学自習の学習サイクルを持つようにする。

□ICTの活用等による「個別最適な学び」の推進

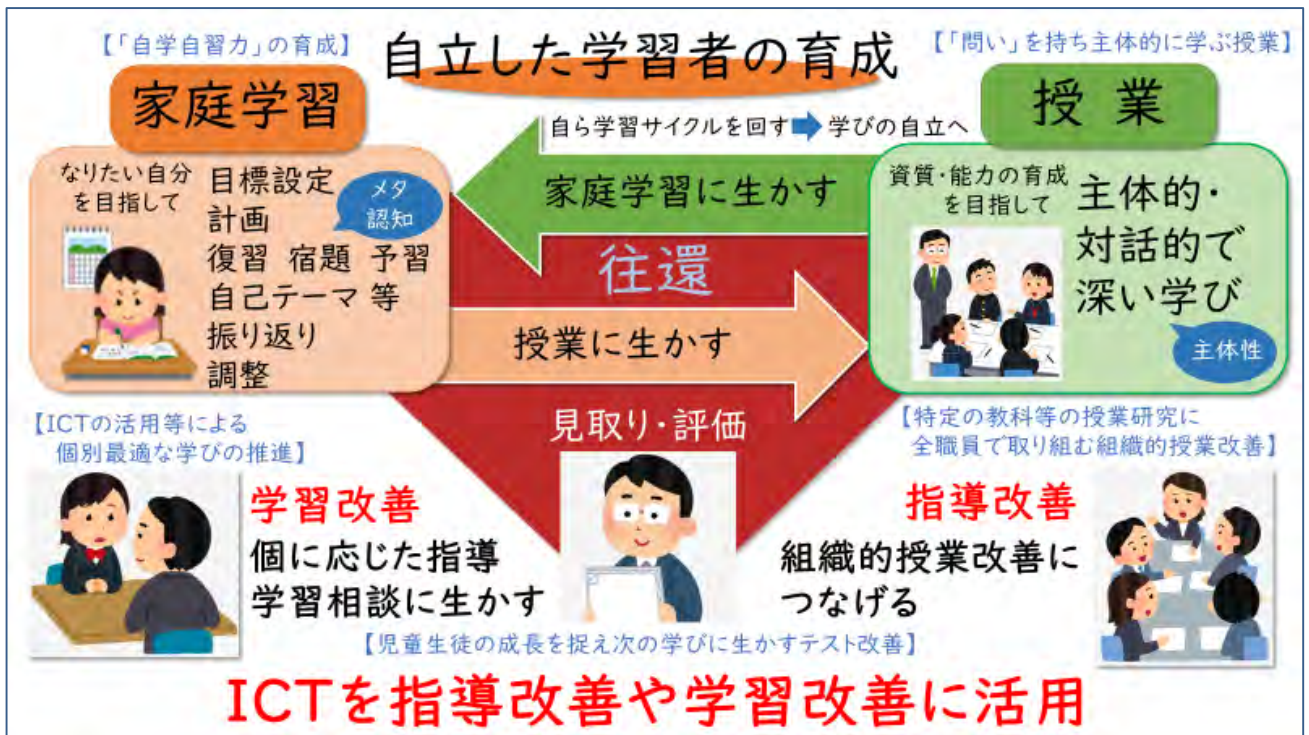
学習サイクルの中で、教師は、児童生徒一人一人の学習状況を見取って評価し、その分析を日々の授業や指導の改善に生かす。また、児童生徒に対しては、個に応じた指導や学習相談に生かして学びの自立を促す。このサイクルを支えるため、ICTを積極的に活用する。

□特定の教科等（道徳科、特別活動、総合的な学習の時間など）の授業研究に全職員で取り組む組織的授業改善

授業改善を進めるためには、道徳科など、特定の教科等の授業研究に全職員で取り組む場を持つことが有効と考える。特定教科等の授業づくりに「協働」で取り組むことによって、授業改善の課題や視点を共有化し、授業改善に組織的に取り組む意識を高める。

□児童生徒の成長を捉え、次の学びに生かすテスト改善

児童生徒の学びに対する主体性を高めるために、テストの内容は、児童生徒の良い点や改善点を評価し、学ぶ意義や価値を実感できるものにする必要がある。テスト改善を切り口に「指導と評価の一体化」に取り組み、学習評価の改善、学習指導の改善へと進む。



「自立した学習者の育成」のイメージ図

3 義務教育課ポータルサイトの活用



沖縄県教育庁義務教育課では、指導資料や研修資料、説明動画等を一元的に取り扱う「義務教育課ポータルサイト」を開設した。今後、資料提供や情報発信を通じて、学校の主体的な取組を支援していく。

義務教育課ポータルサイト



○ 2030年の社会と子供たちの未来（一人一人がその創り手として）

情報技術の飛躍的な進化等を背景として、あらゆる分野でのつながりが国境等を越えて、多様な人々や地域間が緊密につながる状況が進展しています。このような社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、このことは全ての子供たちの生き方にも影響を及ぼすものとなっています。

国においては、2030年以降の社会を展望した教育施策の重点事項を「第3期教育振興基本計画」（計画期間：2018～2022年度）において示すとともに、平成29年には、幼稚園教育要領や小学校・中学校学習指導要領等を告示しました。その前文では、「これからの幼稚園・学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とされ、これからの学校に求められることや、これから育てるべき幼児児童生徒の姿について示されています。

本県においては、2030年を想定年とした基本構想である「21世紀ビジョン」を示し、「多様な能力を発揮し、未来を拓く島」などの県民が望む5つの将来像の実現を図るための「基本方針」や「実施計画」を策定しています。そこには、「『人材こそが最大の資源』との考えを共有する沖縄」が掲げられ、子供たちの笑顔が常に絶えない、希望と優しさに満ちた豊かな社会の実現を願い取組を進めることとしています。

○ 「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」の役割

本県の学力向上に係る本格的なあゆみは、昭和61年に開催された「沖縄県学力向上対策委員会」において提出された答申に基づく「学力向上対策」から始まりました。それから平成29年度～31年度（令和元年度）の「学力向上推進プロジェクト 授業改善の6つの方策」まで、30年以上にわたる学力向上の取組を通して、学校や家庭・地域、関係機関が本県幼児児童生徒の課題を共有し、一体となって取り組んだ結果、近年、全国学力・学習状況調査結果において、小中学校で一定の成果が、目に見える形で現れてきています。一方で、残された課題や今後取り組むべき方向も見えてきました。

今後、計画推進の5か年間を見通した「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」は、年次ごとにその成果と課題を把握しながら改訂作業を行うなど、すでに実施している幼稚園教育要領等や令和2年度から順次本格実施された学習指導要領の着実な展開推進していきます。併せて、本県独自の視点を交えた学力向上の施策を推進しながら、本県ならではの「社会に開かれた教育課程」の実現を目指します。

○ さらに県全体が一体となった取組へ

これまでの本県における学力向上推進の歩みを通して培ってきた、学校や家庭・地域、関係機関の連携体制をさらに進めながら、効果的な取組を展開します。

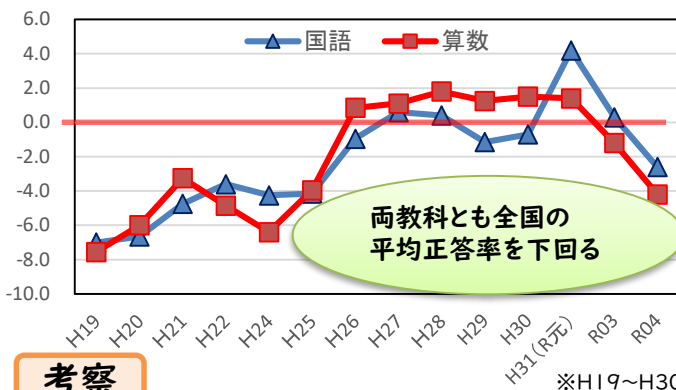
具体的には、学習指導要領や県施策等と一体的な取組とするとともに、市町村及び学校の主体性や独自性を生かした展開とするために、各関係機関等が「子供の成長の姿」を互いに共有していくことが、何にも増して大切だと考えます。

これからの沖縄県が向かう2030年の社会とその先の未来を、子供たち自身が創り上げていくことができるように、子供たちに必要とされる資質・能力を見据え、「『人材こそが最大の資源』との考えを共有する沖縄」として、県全体で一体となって展開していくこととします。

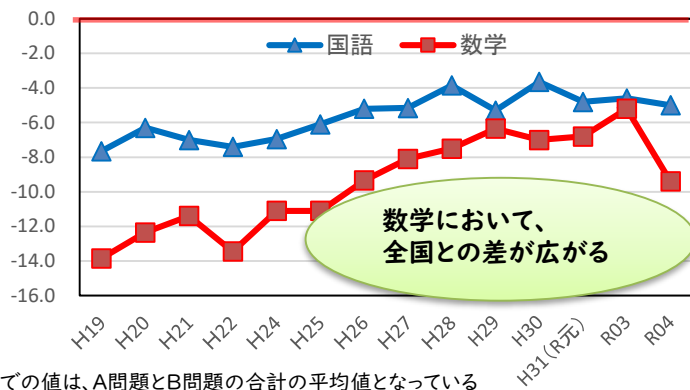
学力向上推進の取組の現状（令和4年現状値）から

○ 全国学力・学習状況調査結果（全国平均正答率との差）の推移 [H19~R04]

【小学校】



【中学校】



考察

※H19~H30までの値は、A問題とB問題の合計の平均値となっている

- ・小、中学校とも全ての科目において、全国と比較して平均正答率は±10%の範囲内にあり、大きな差は見られない。（『全国学力・学習状況調査 報告書（国立教育政策研究所）』より）
- ・小学校は国語、算数とも下降傾向で、全国平均正答率を下回る結果となった。
- ・中学校は国語、数学とも緩やかな改善傾向が継続していたが、全国平均正答率との差が広がる結果となった。
- ・小、中学校とともに、自分の考えや意見をまとめ、記述して解答する設問において、無解答率が高い。
- ・教育活動全般を通して、既存の知識・技能を生かしながら、**目的意識を持ち、自分の考えを書いたり、交流活動を通して自分の考えを深めたり広げたりして明確に伝える、振り返りを通して自分の考えを整理するなど、思考力・判断力・表現力等の育成が今後も必要である。**

○ 学校質問紙調査

◇ 県版質問紙（令和4年度6月と11月の比較）

※いずれの項目も「当てはまる」「している」の回答

「自己肯定感の高まり」に係る項目

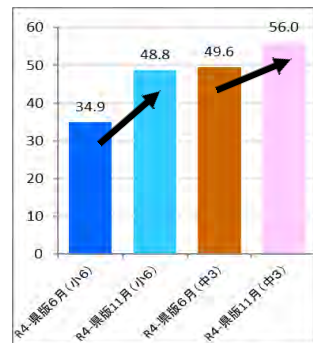
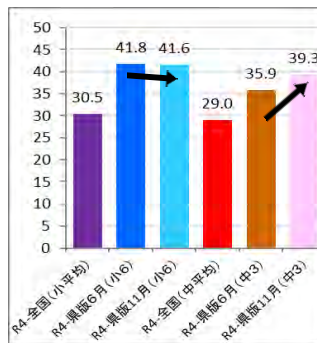
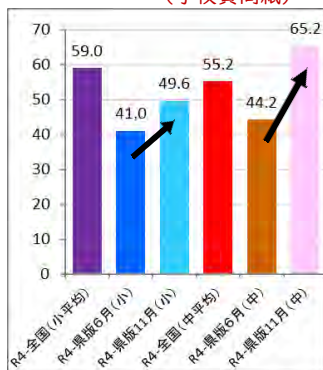
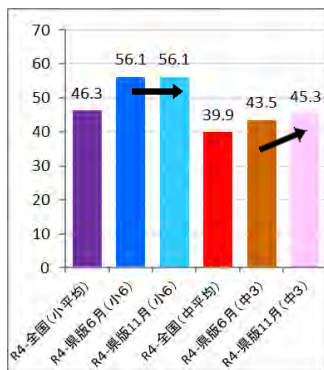
質問 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。（児童生徒質問紙）

質問 学校生活の中で、児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（認めるなど）取組が充実している。（学校質問紙）

「組織的な関わり」に係る項目

質問 あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。（児童生徒質問紙）

質問 学級活動及び児童会・生徒会活動について、児童生徒の自主性が育まれる取組が行われ、全職員でその意義が共有されている。（学校質問紙）



考察

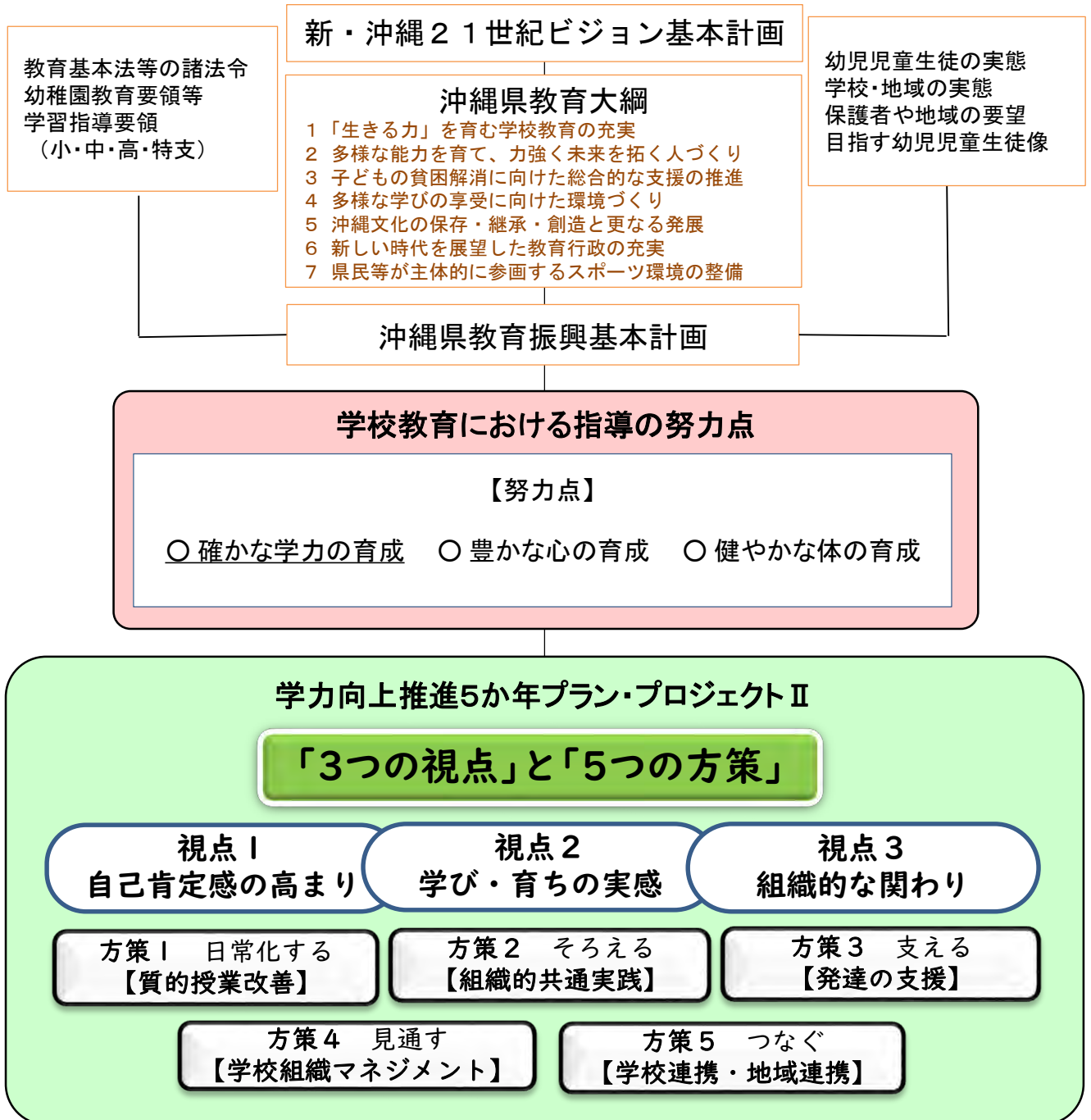
- ・「自己肯定感の高まり」に係る項目では、学校側・児童生徒側ともに肯定的な回答の割合が横ばいか伸びていて、特に学校側の評価が大きく伸びている。
- ・「組織的な関わり」に係る項目では、小学校児童側の評価がわずかに落ち込んでいるが、中学校生徒側及び小・中学校側の評価は伸びている。
- ・コロナ禍でも「できること」を考え様々な取組を進める中で、よさを見取り励ます教職員と、学び・育ちを実感しながら取り組む児童生徒の様子が伺える。引き続き、児童生徒の自立に向けて「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」の視点で各学校の取組の充実を図ることが大切である。

I 学力向上推進施策の基本的な考え方

P・PⅡの位置付け

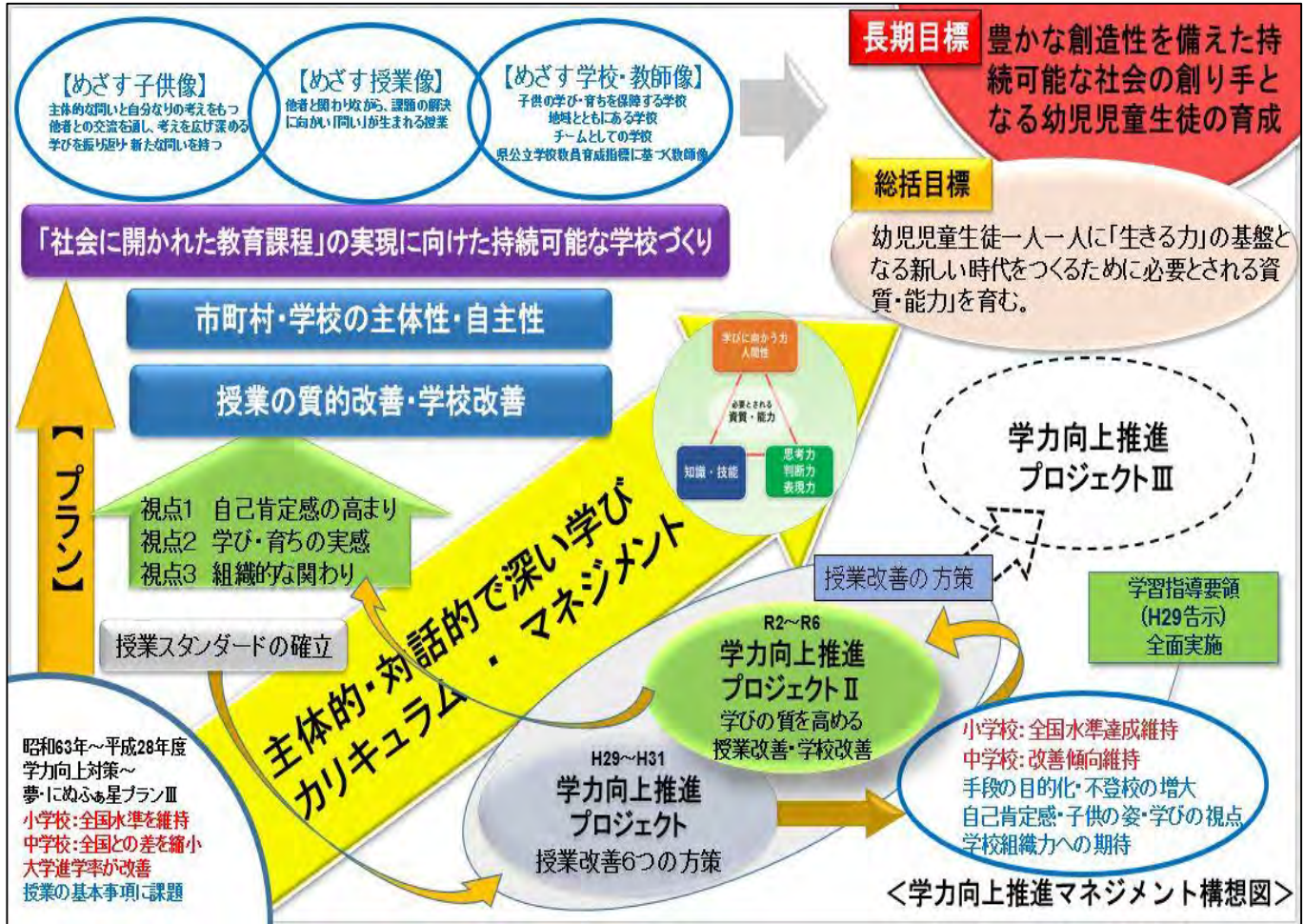
本県の学力向上推進施策は、昭和63年度以来、県全体で一丸となって進めてきた総合的なプランとしての学力向上施策を継承し、さらに発展的に展開するために、関連法令や学習指導要領及び本県主要施策等を見据えた取り組みとする必要がある。

そこで、「沖縄県教育振興基本計画」に基づいた、「学校教育における指導の努力点」の「確かな学力の育成」を中心に据えた学力向上推進施策を、以下の図のように展開していくこととする。



Ⅱ 学力向上の全体構想

Ⅰ 学力向上推進における全体構想について



本県は、全国水準の学力保障を目標にした学力向上推進施策を推進してきた。特に平成29年度から3か年推進した学力向上推進プロジェクトにおいては、授業改善に焦点化した6つの方策において、授業スタンダードの確立を図る「授業における基本事項」の重点取組や「主体的・対話的で深い学び」を目指した「問いが生まれる授業」づくりなど、授業改善の方向性をより明確にした具体的な施策を戦術的に位置付け推進してきた。

学習指導要領（H29告示）で示された「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の実施を通して、総括目標「幼児児童生徒一人一人に生きる力の基盤となる新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む」長期目標「豊かな創造性を備えた持続可能な社会の創り手となる幼児児童生徒の育成」を目指すために、これまでの本県の学力向上推進の成果と課題から「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」を学力向上推進の重要な視点として位置付けた。

この3つの視点を手がかりに学力向上推進プロジェクトⅡとして「学びの質を高める授業改善・学校改善」をより戦術的に推進していく。

さらに、戦略的プランとして「市町村・学校の主体性・自主性」を基盤とした「『社会に開かれた教育課程』の実現に向けた持続可能な学校づくり」を目指す道筋を探りながら、新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育むことを目指し、長期的には持続可能な社会の創り手としての幼児児童生徒を育むことを目標にした学力向上推進施策を推進していくこととする。

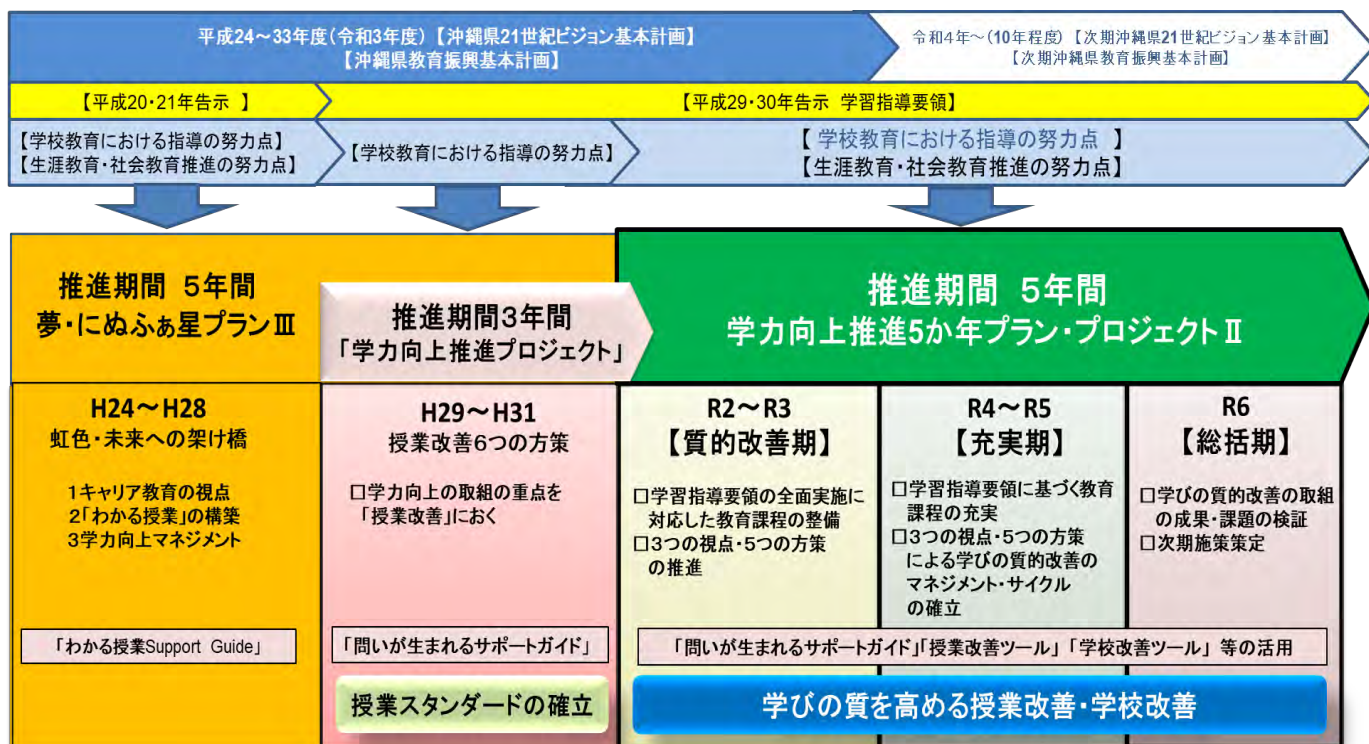
2 推進期間の設定について

「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」は、5か年間の推進期間を「2年・2年・1年」と区切り、3段階のステップを踏みながら推進することを想定している。

「社会に開かれた教育課程の実現を可能とする持続可能な学校づくり」に向けて、資質・能力を育む授業改善を着実に推進していくためには、本県の学力向上推進施策を授業改善から学校改善さらには地域や家庭との連携を基盤とした地域社会との絆づくりへと広がりをもって広義に捉えていく必要がある。

こうしたビジョンの実現のために、5年間の推進期間と3段階のステップを設定し、取組状況を確認しつつ施策の修正を図りながら推進することとした。

※ 令和4年度以降の新たな基本計画等の策定に伴い、内容に一部修正を加えた。



【参考】 県学校教育関連施策及び新学習指導要領全面実施スケジュール

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
県教育施策	沖縄県教育振興基本計画（後期改訂版）			（新）沖縄県教育振興基本計画				
	学校教育における指導の努力点		学校教育における指導の努力点					
	学力向上推進プロジェクト			学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ				
幼稚園	全面実施							
小学校	全面実施							
中学校	全面実施							
高等学校	年次進行実施							
	新大学入試制度			※令和7年度入学者選抜試験（令和7年3月実施）の入試から新県立高校入学者選抜制度を開始予定				

3 学力向上推進の目標と学校診断的評価

(1) 長期目標

「社会に開かれた教育課程」の実現による、豊かな創造性を備えた持続可能な社会の創り手となる幼児児童生徒の育成

(2) 総括目標

幼児児童生徒一人一人に「生きる力」の基盤となる「新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力」を育む

(3) 学校診断的評価（学校アセスメント）

学力向上推進の3つの視点から診断的評価の重点項目を児童生徒と学校の両面で設定し、学校アセスメントとしての評価を行う。

各種調査における県や国の平均値を指標としながら、各市町村・学校の状況を診断的に捉え、学校課題を明確にすることによって、市町村・各学校の主体的な組織マネジメントの機能を高めると共に、各校の強みを生かした特色あるカリキュラム・マネジメントの充実を図り、目指す子供像の具現化や資質・能力の育成につなげる。

学校診断的評価（学校アセスメント）					
	自己肯定感の高まり		学び・育ちの実感		組織的関わり
	<児童生徒>	<学校>	<児童生徒>	<学校>	<学校>
主な診断的評価項目	<ul style="list-style-type: none"> ○自分にはよいところがある。 ○先生はあなたのよいところを認めてくれている。 ○ものごとを最後までやりとげうれしかったことがある。 ○学校に行くのが楽しいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校生活の中で、一人一人のよさや可能性を見付け評価する取組を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○家で自分で計画を立てて勉強をしている。 ○課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる。 ○話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりできていると思う。 ○学級みんなで話し合っ決めてきたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがある。 ○学級生活をよりよくするために話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭学習の取組として、児童生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えている。 ○児童生徒は、授業では、課題解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる。 ○習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法及び工夫をしている。 ○お互いの意見のよさを生かして解決方法などを合意形成できるよう指導している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習規律の維持を徹底している。 ○児童生徒の自主性が育まれる取組が行われ、全職員でその意義が共有されている。 ○児童生徒の姿や地域の現状に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。 ○学級運営の状況や課題を全職員で共有し、学校として組織的に取り組んでいる。 ○校内研修の実施計画を整備するなど、組織的、継続的な研修を行っている。
基礎	<ul style="list-style-type: none"> ○豊かな体験を通して、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする。○気付いたことや、できるようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする。○心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。 <p>(1)健康な心と体 (2)自立心 (3)協同性 (4)道徳性・規範意識の芽生え (5)社会生活との関わり (6)思考力の芽生え (7)自然との関わり・生命尊重 (8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 (9)言葉による伝え合い (10)豊かな感性と表現</p>				
分析の視点例	<ul style="list-style-type: none"> ○自己肯定感の状況診断 ・自分自身のよさの自覚 ・居場所としての学校 ・学校満足度 □全国・県平均の年度内及び経年の推移 		<ul style="list-style-type: none"> ○授業改善の診断 ・「主体的・対話的で深い学び」の改善状況 ・課題のある領域分野(教科・体力)の改善状況 ○生徒指導上の課題の改善状況 ・登校復帰率 ・いじめ解消 □全国・県平均の年度内及び経年の推移 		<ul style="list-style-type: none"> ○学校組織力の診断 ・学びに向かう集団づくり(自律性) ・カリキュラム・マネジメントの充実度 ・同僚性・協働性 □全国・県平均の年度内及び経年の推移
調査	<ul style="list-style-type: none"> □全国学力・学習状況調査 □全国体力・運動能力・運動習慣等調査 □沖縄県版児童生徒・学校質問紙調査 □県学力到達度調査 □県学力定着状況調査(学びのたしかめ) □児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 □学校評価等 				

(4) 成果指標

全国学力・学習状況調査や県学力到達度調査などの結果を参考に総合的に分析し、判断する。

Ⅲ 学力向上推進の「3つの視点」

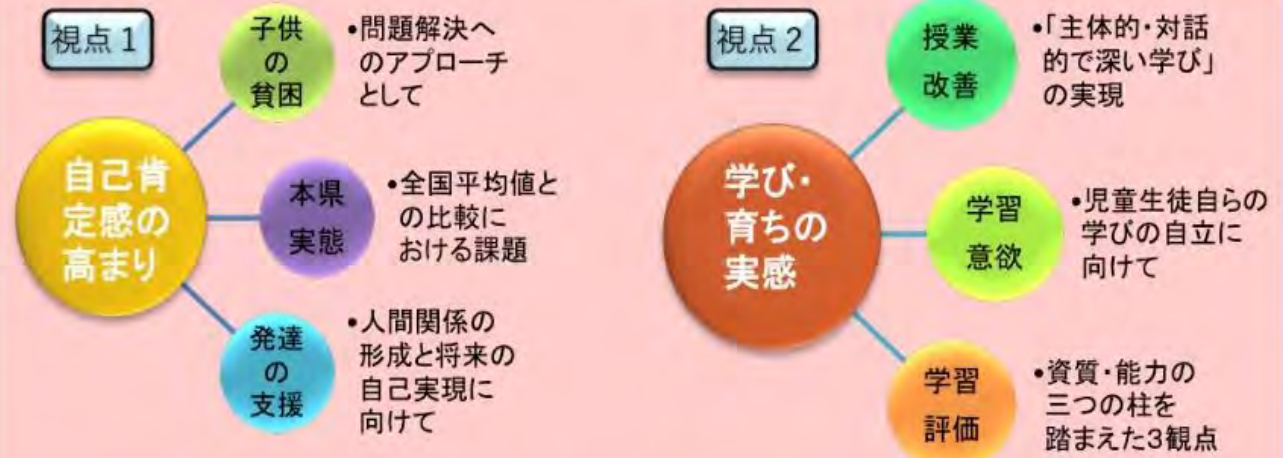
Ⅰ 「3つの視点」について —授業の質的改善と学校改善—

全国学力・学習状況調査における質問紙調査の結果から、県内の児童生徒の意識や学校の取組状況は、経年比較では改善の傾向を示しているものの、全国平均値との比較においてはいくつかの課題が残されている。特に、自分のよさや友達との関わり等に関することや、児童生徒の学び方や学んだことを生かすこと等、そして学校の組織的な取組等に関してさらなる改善の取り組みが求められている。

学力向上施策「夢・にぬふぁ星プランⅢ」では3つの柱を設定し、また「学力向上推進プロジェクト」は「授業改善」を取組の重点として掲げてそれぞれの推進を図ってきた。

本プランにおいても、関係機関等が連携し、さらなる学力向上の取組を推進するために、これまでの課題等を焦点化した3つの視点を示し、具体的な方策を立てて総合的な取組とすることとした。これからの5か年間の推進期間においては、以下の「3つの視点」に基づき、授業の質的改善と学校改善を推進しながら学力向上を図っていく。

「3つの視点」と関連する背景



「3つの視点の捉え」

<自己肯定感の高まり>

「児童生徒が、自分のよさや可能性を認識すること」

<学び・育ちの実感>

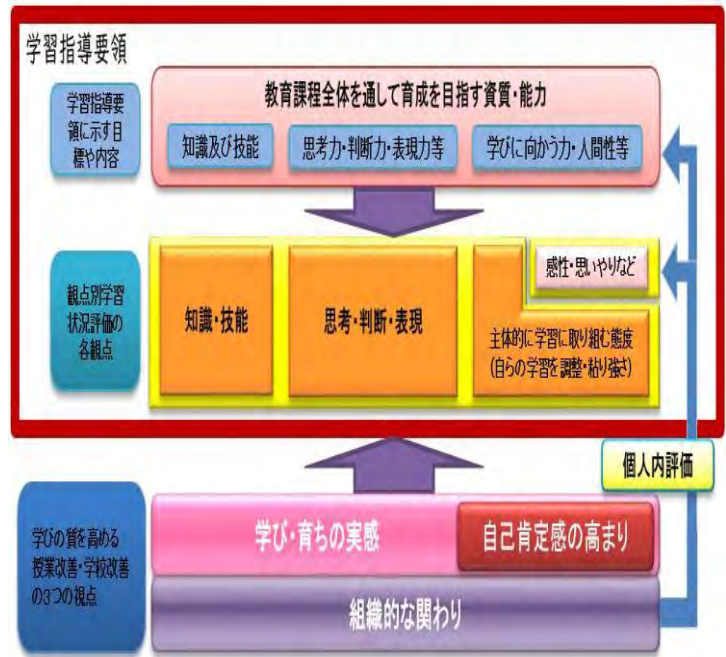
「児童生徒が、学ぶことの意義や価値を実感し、資質・能力を伸ばすこと」

<組織的な関わり>

「各学校が、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」

2 「学力向上推進の3つの視点」と「学習評価」との関連について

学習指導要領（H29告示）では、各教科等の目標及び内容が資質・能力の三つの柱で再整理されたことを踏まえ、観点別学習状況の評価についても、指導と評価の一体化を推進する観点から「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理された。また、「学びに向かう力、人間性等」のうち「感性、思いやり」など観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況については、「個人内評価」として実施するものとされており、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要である。



<自己肯定感の高まり>との関連

児童生徒の良い点や可能性、進歩の状況などを適切に把握してフィードバックするなど指導に生かす評価を効果的に取り入れることで、児童生徒が自分の特徴に気づき、よい所を伸ばし、自己肯定感を高めながら、日々の学校生活を送ることができるようになることが大切である。また、個人内評価についても、日常の教育活動の中で適時個々のよさを伝えながら児童生徒の自己肯定感を高めることが、主体的に学習に取り組む態度（自らの学習を調整し、粘り強く取り組む）につながる。

<学び・育ちの実感>との関連

教師が教材研究と児童生徒理解を深め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組み、一人一人の学習状況を丁寧に見取りながら指導に生かす評価を行い、児童生徒に自らの学びや変容を自覚させることが大切である。

そのような学び・育ちの実感を積み重ねることで、児童生徒が自らの目標や課題をもって学習に粘り強く取り組む姿勢が生まれ、日常的な学び・育ちの実感が自己肯定感の高まりに大きな影響を与える。

<組織的な関わり>との関連

児童生徒が自らの学び・育ちを実感し、自己肯定感を高めていくためには、学校全体で組織的かつ計画的に関わることが効果的である。

そのために、校内研究や教科会、学年会等において、何をどのように見取り、どのように評価するか、その結果を児童生徒への支援にどうつなげていくのかを職員間で深め、共有することが必要である。

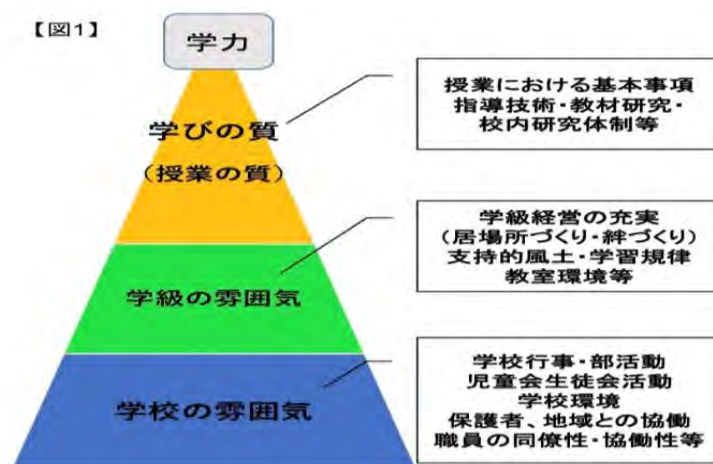
「学力向上推進の3つの視点」を、日常的な授業改善における学習評価の視点とし、学校教育全体の取組として位置付けることで、児童生徒の自己肯定感の高まりと学び・育ちの実感を体現できる組織体制の確立を目指す。

Ⅳ 学力向上推進プロジェクトⅡ

1 学びの質を高める授業改善・学校改善の考え方

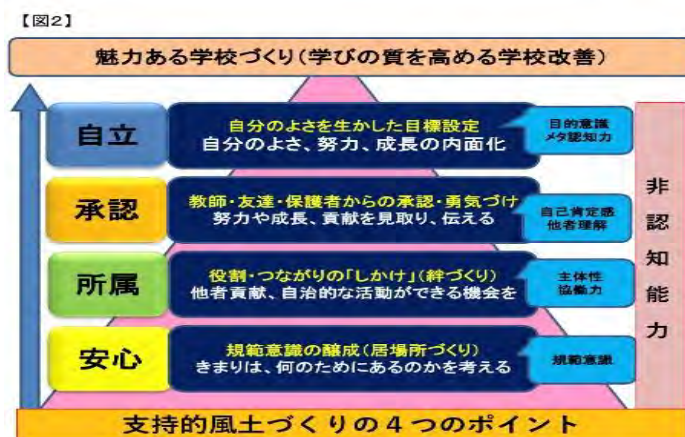
学力向上推進プロジェクトⅡでは、取組の重点を授業改善においた前プロジェクトを継承しながら、学習指導要領（H29告示）で示された新しい時代に必要とされる資質・能力を育むことを目指した学びの質を高める授業改善を推進する。

学びの質を高める授業改善を推進するにあたっては、その土台となる学級や学校の雰囲気を醸成する学校改善の取組を、授業改善と密接に関わる重要な取組として位置付ける。図1参照



〔参考〕子どもたちを“座標軸”にした学校づくり ―授業を変えるがキリム・マネジメント―

また、学びの質を高める学校改善を推進するにあたっては、3つの視点「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」を踏まえながら、本県の「不登校児童生徒への支援の手引き」における「安心」「所属」「承認」「自立」といった4つのポイントを念頭においた取組を推進することで、子供たちの自主的な学びや育ちを支援し、キャリア形成を図る取組となるよう留意したい。図2参照



沖縄県教育委員会 義務教育課「不登校児童生徒への支援の手引き」より

支持的風土づくりの4つのポイント

【ポイント①「安心」】(規範意識を育む)

児童生徒が安心して学校生活を過ごせるために、規範意識を醸成することが必要です。その際、きまりの意義や価値を児童生徒が実感することが大切です。

【ポイント②「所属」】(主体性・協働性を育む)

安心できる集団の中で、他者へ貢献したり、他者と協働して何かをやり遂げる機会、自主的な活動が展開できる環境（組織の整え）を意図的にしかけ、主体性や協働性を育むことが大切です。

【ポイント③「承認」】(自己肯定感・肯定的他者理解を育む)

授業中や様々な活動の場面で、一人一人の努力や成長、貢献を丁寧に見取り、具体的に承認・勇気づけのメッセージを伝えることが大切です。その際、教師から、児童生徒相互、保護者から等、多様な形で承認を得られる工夫が必要です。

【ポイント④「自立」】(目的意識・メタ認知力を育む)

承認を通して気付いた、自分の良さや可能性をもとに、将来の夢や希望、そのための具体的な目標を設定することで目的意識を育むことが大切です。また、日々の授業や学級活動、行事等において「めあて」「振り返り」を行うことで、学校生活が自身の成長につながっていることを実感させることが大切です。

沖縄県教育委員会 義務教育課「不登校児童生徒への支援の手引き」より

2 学びの質を高める「5つの方策」

方 策	【視点1】 自己肯定感の高まり	【視点2】 学び・育ちの実感	【視点3】 組織的な関わり	【改善ツール等】 □継続・改訂ツール ■新規ツール ○事業・取組等
方策1 日常化する 【質的授業改善】	<input type="checkbox"/> 児童生徒が学んだことの意義や価値を実感し、自己肯定感を高める個人内評価等の取組を日常化する <input type="checkbox"/> 生徒指導の4つのポイントを生かした授業を日常化する <input type="checkbox"/> 資質・能力を育むために、単元を見通した授業改善を日常化する			【授業デザイン】 <input type="checkbox"/> 問いサボ <input type="checkbox"/> 授業における基本事項 <input type="checkbox"/> 授業デザインMAP <input type="checkbox"/> 授業プランシート <input type="checkbox"/> 単元プランシート
方策2 そろえる 【組織的共通実践】	<input type="checkbox"/> 見取る視点・観点をそろえる <input type="checkbox"/> 学習の基盤となる資質・能力の育成			【共通実践項目の設定等】 <input type="checkbox"/> アセスメント調査・分析資料等 <input type="checkbox"/> 共通実践項目
方策3 支える 【発達の支援】	<input type="checkbox"/> 確かな児童生徒理解 <input type="checkbox"/> 支持的な風土をつくる学級経営の充実(ガイダンスとカウンセリング) <input type="checkbox"/> 学びに向かう集団づくり			【発達支援】 <input type="checkbox"/> キャリアサポート <input type="checkbox"/> 不登校児童生徒への支援の手引 <input type="checkbox"/> ユニバーサルデザインの考え方を生かした支援
方策4 見通す 【学校組織マネジメント】	<input type="checkbox"/> 学校課題解決に向けた組織マネジメント機能を高める <input type="checkbox"/> 学校評価と関連付けたカリキュラム・マネジメント及び年間サイクルの確立 <input type="checkbox"/> 授業改善・学校改善に向けた校内研究体制の充実			【学校デザイン】 <input type="checkbox"/> 学校デザインシート(構想図) <input type="checkbox"/> 学校改善ルーブリック <input type="checkbox"/> フォーカスシート(焦点化) <input type="checkbox"/> 学校における年間サイクル <input type="checkbox"/> アセスメントシート
方策5 つなぐ 【学校連携・地域連携】	<input type="checkbox"/> 市町村の特色を生かした施策推進による学校づくり <input type="checkbox"/> キャリア教育の視点を踏まえた校種間の連携強化 <input type="checkbox"/> 学校・地域・家庭の互恵的関係の構築			【連携の枠組み・制度活用】 <input type="checkbox"/> 学校運営協議会制度 <input type="checkbox"/> 地域学校協働本部事業 <input type="checkbox"/> 小中一貫・連携教育の推進 <input type="checkbox"/> キャリア教育の推進 <input type="checkbox"/> OSDGs・ESDの推進
カリキュラム・マネジメント				

方策1

日常化する（質的授業改善）

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて日々の質的授業改善の取組を日常化する

※「質的授業改善」とは「学びの質を高める授業改善」の意

「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業改善を進めるため、以下の3点を推進する。

□児童生徒が学んだことの意義や価値を実感し、自己肯定感を高める個人内評価等の取組を日常化する

一人一人のよい点や成長した点について積極的にフィードバックを行い、これまでの学びとこれからの学習活動を結び付けながら児童生徒の主体的な学習活動を引き出すような指導の充実を図る。

□生徒指導の4つのポイントを生かした授業を日常化する

- ◎自己存在感の感受
 - ・児童生徒が「自分も一人の人間として大切にされている」と感じ、自分を肯定的に捉える自己肯定感や、認められたいという自己有用感を育む工夫がある授業
- ◎共感的な人間関係の育成
 - ・児童生徒が、互いに認め合い・励まし合い・支え合える学習集団づくりを促進していく授業
- ◎自己決定の場の提供
 - ・児童生徒に、意見発表の場を提供したり、児童生徒間の対話や議論の機会を設けたりする等して、教員が、児童生徒の学びを促進するファシリテーターとしての役割を果たしている授業
- ◎安全・安心な風土の醸成
 - ・児童生徒が、安全かつ安心して学習できるように配慮され、児童生徒の個性が尊重された授業（授業は一般的に学級単位で行われるため、学級が「(心の)居場所」になることが望まれる)

□資質・能力を育むために、単元を見通した授業改善を日常化する

単元や題材など内容や時間のまとまりをどのように構成するかという単元を見通した単元（授業）デザインの工夫・改善を通して、資質・能力をバランスよく育成できるよう学習活動の充実を図る。

※ 例えば、主体的に学習に取り組めるような見通しを立てる活動、自身の学びや変容を自覚するような振り返る活動、自分の考えを広げ深めるような対話的な活動、学びの深まりをつくり出すために児童生徒が考える活動や教師が教える活動など、単元（授業）の中に効果的な学習活動の構成を行い、見通しをもって三つの資質・能力をバランスよく育成する等。

方策2

そろえる（組織的共通実践）

アセスメントによる実態認識・課題認識をそろえる。

「学びの質を高める授業改善・学校改善」を図るためには、学校全体でアセスメントによる実態認識や課題認識を共有し、組織的共通実践を効果的に推進する必要がある。そのために、以下の2点を推進する。

□見取る視点・観点を共有し共通実践する

学びに向かう集団づくりとして必要な指導や援助を行うガイダンス的側面と、個々の児童生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方からバランスよく共通実践に取り組むことが重要である。

例えば「学習規律」の定着を図る指導などの共通実践においても、児童生徒の一人一人のよさや可能性を認めつつ、児童生徒自らがその目的や意義を受け止め、自己肯定感の高まりや学び・育ちの実感が伴うよう、見取る視点・観点を共有し、共通実践に取り組む。

□「学習の基盤となる資質・能力」の育成

児童生徒の日々の学習や生涯にわたる学びの基盤となる「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等」資質・能力の育成について体系的・継続的に取り組むことが重要である。特に、言語能力の向上は、児童生徒の学びの質の向上や資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止め、取組を推進することが大切である。

また、ここで示した資質・能力の育成以外にも、各学校においては児童生徒の実態を踏まえ、学習の基盤となる資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントの中でその育成に取り組む。

方策3

支える（発達の支援）

支持的風土のある学校・学級経営を通して発達の支援を充実させる。

日ごろから確かな児童生徒理解に基づいた学校・学級経営の充実を図り、教師と児童生徒の信頼関係及び児童生徒相互のよりよい人間関係や集団づくりを進め、組織として支持的風土の醸成を図り発達を支援する。

□確かな児童生徒理解

児童生徒を多面的・総合的に理解するために、学級担任による観察や面接に加えて、学年の教師、教科担任、養護教諭、部活動顧問、スクールカウンセラー等による広い視野から児童生徒理解を行うことは大切である。また、「生徒指導PDCA×2」を参考に、全職員で児童生徒の状況を評価・分析する場を設定し、諸活動のマネジメントサイクルに生かす。

□支持的な風土をつくる学校・学級経営の充実（ガイダンスとカウンセリング）

支持的風土づくりの4つのポイント「安心（居場所づくり）」「所属（絆づくり）」「承認」「自立」を踏まえた諸活動の充実を図る。指導・支援に際しては、児童生徒の主体性を引き出す集団の場面でのガイダンスと、個別の面談や言葉がけを通じたカウンセリング（教育相談を含む）の双方の趣旨を踏まえる。

□学びに向かう集団づくり

児童生徒の自主的・実践的な態度を育てることは、個々の児童生徒や集団における問題解決能力の高まりにつながる。学びに向かう集団づくりを進めるために、児童生徒の組織的な活動を大切にしたい学級活動や児童会・生徒会活動の充実を図る。

方策4

見通す（学校組織マネジメント）

学校組織マネジメントの機能を高め、カリキュラム・マネジメントの充実を図る。

自校の教育課程の編成、実施、評価及び改善に関する課題がどこにあるのかを明確にして職員間で共有し改善を行うことにより学校教育の質の向上を図り、カリキュラム・マネジメントの充実に努める。

□学校課題解決に向けた組織マネジメントの機能を高める。

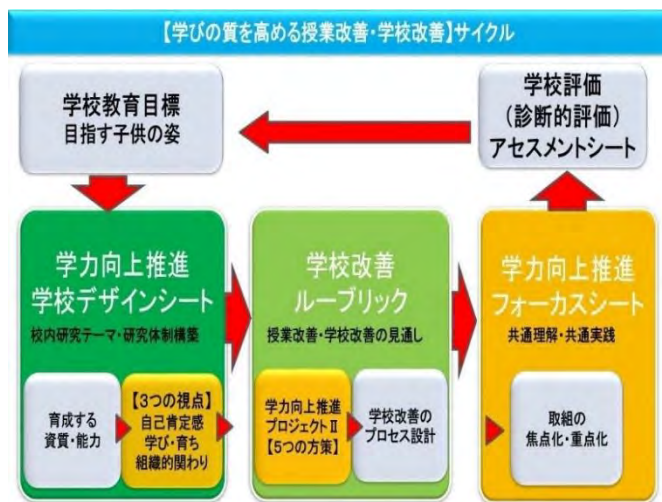
学校教育目標から目指す子供像を設定し、必要とされる資質・能力の育成に向けて、学力向上推進の3つの視点と5つの方策を焦点化した取り組みを展開することで学力向上の効果性を高める。

□学校評価と関連付けたカリキュラム・マネジメント及び年間サイクルの確立

「学びの質を高める授業改善・学校改善」サイクルを確立することで、各校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントの推進を図る。

□授業改善・学校改善に向けた校内研究体制の充実

「主体的・対話的で深い学び」を通して資質・能力の育成を目指す授業改善や土台となる学校改善を推進するための学校組織機能の核として校内研究体制の充実を図る。



方策5

つなぐ（学校連携・地域連携）

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校連携・地域連携を推進する。

これからの学校では、ESD(持続可能な開発のための教育)を通したSDGs(持続可能な開発目標)の実現に向けて、一人一人の児童生徒が持続可能な社会の創り手となるように取り組むことが求められる。

また、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に必要とされる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現が重要である。そのために、以下の3点を推進する。

□市町村の特色を生かした施策推進による学校づくり

市町村においては、地域の実情や課題に応じた教育課程の編成や、地域の特色を生かした教育活動に取り組んでいる。市町村教育委員会の施策を生かし、緊密な連携を図りながら、研究指定校の委託や学校支援訪問等を通じて学校への指導・支援を充実させ、連絡協議会等を開催し、情報共有を図る。

□キャリア教育の視点を踏まえた校種間の連携強化

授業や行事での交流等を校種間で計画的に行うことで連携を図る。特別活動を要としたキャリア教育では、「キャリア・パスポート」等を活用しながら、小・中・高等学校等の12年間を系統的・継続的に支援することで、自己実現に向けて児童生徒自ら見通しを持ち、振り返りを行うなど、主体的に学びに向かう力を育む。

□学校・地域・家庭の互恵的関係の構築

保護者や地域住民等による、学校運営や教育活動への参画のために、学校運営協議会等の開催を通じて、各学校で育成を目指す資質・能力、教育目標や教育課程などを、学校、保護者、地域間で共有しながら相互に支え合う互恵的関係の構築を図る。

★より多くの、より幅広い層の地域住民、団体等が参画し、目標を共有し、「編やかなネットワーク」を形成



「地域全体で未来を担う子供たちの成長をさせる仕組み（概念図）」
(文部科学省資料より)

V 本施策推進に向けた各機関の取組

本施策の推進にあたっては、園、学校、家庭・地域、教育行政がそれぞれの特性を生かして、以下のような組織体制づくりや事業を積極的に推進する。

1 園・学校

園・学校は、子供たちに知・徳・体の調和がとれた「生きる力」を育む場であり、子供たちが学習に意欲的に取り組み、培うべき力を習得し、子供同士や子供と教職員が互いの信頼関係と敬愛の念を深める中で、子供たちに人格の完成を目指した教育を行う。

教職員は、校長のリーダーシップのもと、学校組織の一員として、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を共有しつつ、日々の教育実践にあたる。

(1) 幼稚園等

- ① 生きる力の基礎を育むことを目指す、全体的な計画（教育課程）の編成・実施
- ② 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を具現化した教育等の工夫改善

(2) 小・中学校

- ① 生きる力を育み、幼小中高など校種間の連携等を重視した教育課程の編成・実施
- ② 研究成果の共有と波及を重視した校内研究体制の構築

(3) 高等学校

- ① 生きる力を育み、創意工夫を生かした特色ある教育活動の編成・実施
- ② 高大接続や社会との接続等、現代の課題に対応した教育課程の工夫改善

(4) 特別支援学校

- ① 障害の状態等を考慮した、生きる力を育む特色ある教育課程の編成・実施
- ② 個々の幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を的確に把握し、教師間の連携協力のもとに一人一人の指導目標や指導内容を設定した個別の指導計画の評価と改善

幼児期の教育及び義務教育の基礎の上に、高等学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、各取組を進める。

2 家庭・地域

家庭・地域は、子供たちに自らのよさや可能性を実感させながら、基本的な生活習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、調和のとれた心身の発達を支援するなど、学校と連携・協力を進め、地域の将来の担い手である子供たちの教育活動に積極的に関わる。

- 家庭での対話、ルールづくり
- 家庭における読書活動の推進
- 家庭学習の習慣化と内容の充実に向けた関わり
- 体験活動の充実
- 地域活動の活性化（子供会・地域行事への参加）等

3 教育行政

教育行政は、子供たちの学力や道徳性、体力などの現状や課題を把握し、実効性のある取組を的確に遂行する。

その際、学校や教職員等に必要な指導助言を行うとともに、教職員が、子供たちに寄り添い関わりながら、自信と誇りを持って教育活動に専念できるよう支援を行う。

- 各種研修会等の実施
- 学校支援訪問
- 各種調査
- 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた支援、指導助言 等

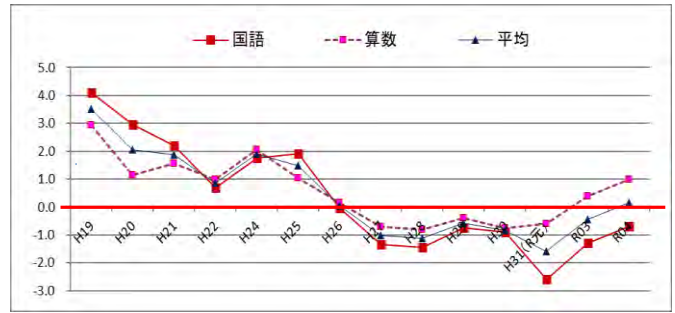
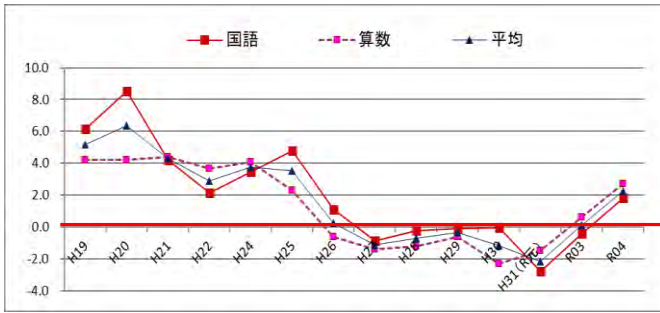
VI 参考データ及び参考資料

□ 参考データ

◎全国学力・学習状況調査 平成19年から令和4年までの推移【小学校】

「本県と全国の正答率30%未満の差」

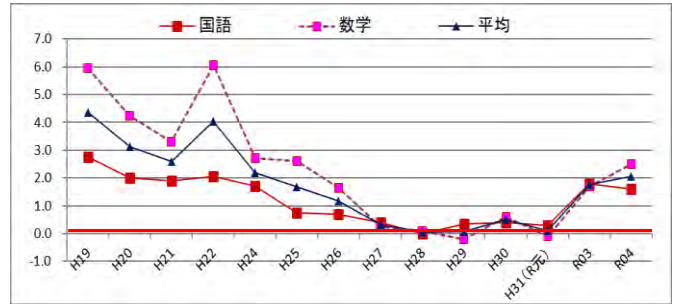
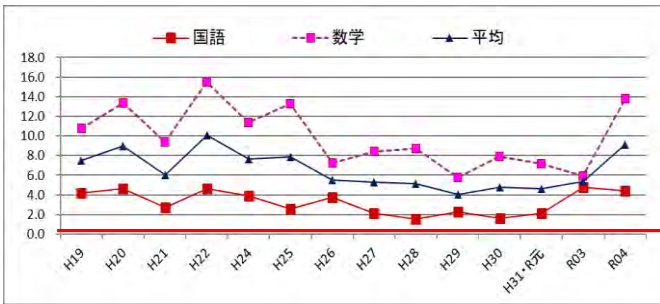
「本県と全国の無解答率の差」



◎全国学力・学習状況調査 平成19年から令和4年までの推移【中学校】

「本県と全国の正答率30%未満の差」

「本県と全国の無解答率の差」



◎児童生徒質問紙調査(小・中) 令和4年度 全国との比較

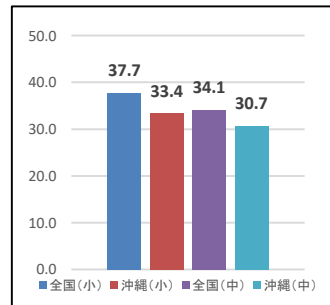
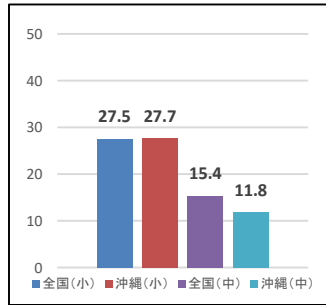
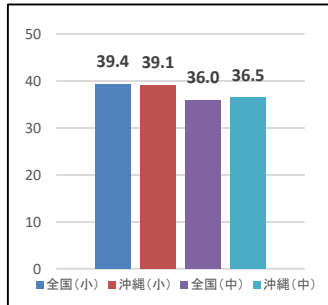
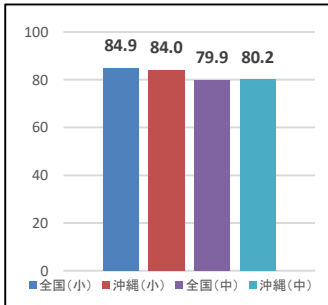
※いずれの項目も「当てはまる」「している」の回答

(1) 朝食を毎日食べていますか

(7) 自分には、よいところがあると思いますか

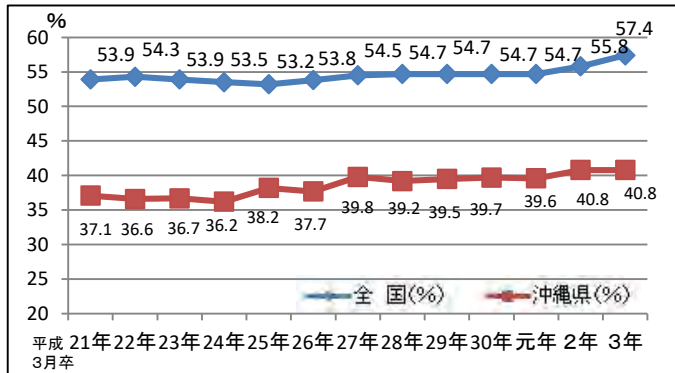
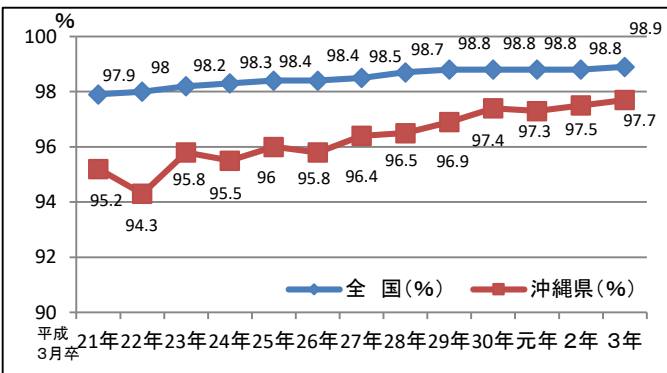
(20) 家で自分で計画を立てて勉強していますか

(43) 話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。



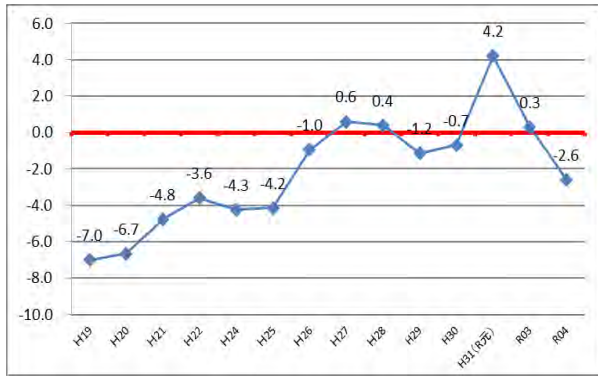
◎高校等進学率の推移 (全国との比較)

◎大学等進学率の推移 (全国との比較)

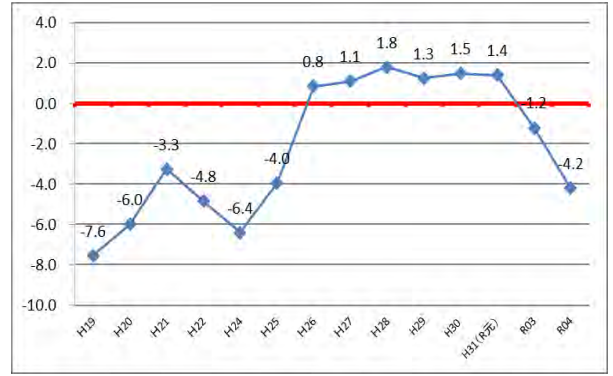


◎令和4年度全国学力・学習状況調査結果（小学校）

小学校 国語



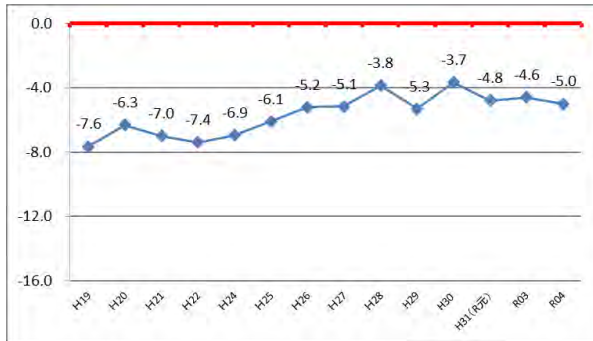
小学校 算数



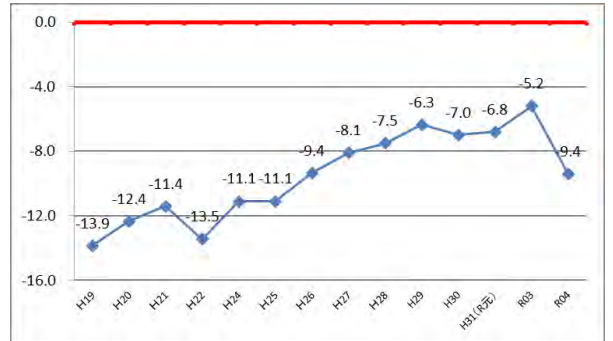
【考察】小学校は、国語、算数ともに下降傾向ではあるが、全国水準を維持している。

◎令和4年度全国学力・学習状況調査結果（中学校）

中学校 国語

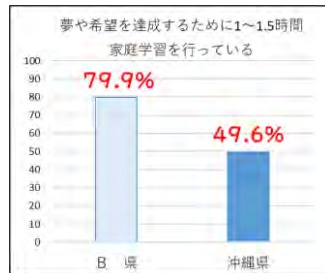
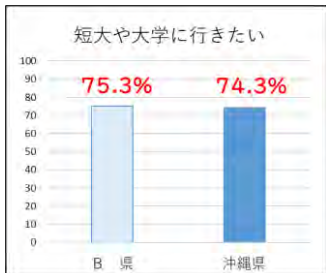


中学校 数学



【考察】国語、数学とも緩やかな改善傾向が継続していたが、昨年度より全国平均との差が広がる結果となった。

◎令和元年 沖縄県児童生徒の学習と将来展望に関する調査



【考察】「大学や短大に行きたい」と回答した割合は他県と同様であるのに対し、「夢や希望を達成するために1時間～1.5時間以上家庭学習をしている」と回答した割合が、30P以上落ち込んでいる。本県児童生徒は、自ら計画し、具体的な学習行動を取ることに課題がみられる。

◎家庭学習に関する指導状況（令和4年度全国学調、学校質問紙の結果）

設問項目	全国との差 (小) [R3]	全国との差 (中) [R3]
家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えたか(教えた)	-7.2 [-13.1]	-9.9 [-7.0]
児童(生徒)が行った家庭学習の課題について、その後の教員の指導改善や児童(生徒)の学習改善に生かしたか(生かした)	-5.8 [-10.1]	-4.6 [-7.2]

【考察】教職員が、家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えることについて、小学校は昨年度より全国平均との差を縮めていて改善が見られる。また、家庭学習を、その後の指導改善や児童生徒の学習改善に生かすことについても、小中ともに全国平均との差を縮めている。学習を自分で成立させられるよう、引き続き「自立した学習者」としての育成を図る取り組みの充実が必要である。

学習指導要領に示された「学びの姿」

義務教育課

()内は、関連する中学校学習指導要領総則解説のページ

支持的な風土(P97)・人間関係や環境を整える(P140)

□ 安心して自分の力を発揮しています (P93)

□ 適切な言語環境と好ましい教育的環境で過ごしています (P81・P96)

新しい時代に求められる資質・能力を育むために(P2)

「何ができるようになるか」
(育成を目指す資質・能力 P2)

□ 過去の学びと今日の学びを「関連付けながら」理解しています (P35)
□ 今日の学びを他の場面で「活用」し「探究」に向かっていきます (P35)

「何を学ぶか」
(教育課程の編成 P2)

□ 教科学習を通して「学習の基盤となる資質・能力」を育んでいます (P49)
□ 「内容や時間のまとまりを見通した計画」の中で、資質・能力を育んでいます (P68)

「どのように学ぶか」
(学習・指導の改善・充実 P2)

□ 「主体的・対話的で深い学び」を通して資質・能力を育んでいます (P76)
□ 「見方・考え方」を働かせ、思いや考えを基に創造しています (P77)
□ 「見通しと振り返り」を通して学習意欲を育んでいます (P86)

「子供一人一人の発達をどのように支援するか」
(子供の発達を踏まえた指導 P2)

□ 「ガイダンスとカウンセリング」を通して、自己指導能力を高めています (P93)
□ 「自己の特性」「学ぶこと」「自己の将来」をつなげキャリア形成を図っています (P98)
□ 組織的な指導方法・体制の「工夫改善」を通して、学習内容を確実に身につけています (P99)

「何が身に付いたか」
(学習評価の充実 P2)

□ 「学習を振り返って次の学習に向かう」ことができます (P90)
□ 自分の「よい点や進歩の状況」を実感しています (P91)
□ 他者との比較ではなく、「一人一人の成長」を大切に考えています (P91)

「実施するために何が必要か」
(理念を実現するために P2)

□ コンピュータ等や教材・教具の活用により興味・関心を喚起しています (P83)
□ 学年会、教科部会など教師間の情報共有により適切な配慮をうけています (P100)
□ カリキュラム・マネジメントを通して質の高い学習環境にいます (P118)

授業デザインを通して習慣化したい 「学びの姿」

義務教育課

支持的な風土・人間関係や環境を整える

【プロジェクトⅡ 方策1・2・3・4・5】

【公立学校職員等育成指標】

子供は、安心して自分の力を発揮し、自己存在感や自己決定の場を与えられる場を通して生活によりよく適応し、豊かな人間関係と有意義な学習環境の中で過ごしています。

新しい時代に求められる資質・能力を育むために

【プロジェクトⅡ 方策1・2・3・4・5】

【学習評価の在り方 ハンドブック】

「何ができるようになるか」
(育成を目指す資質・能力)

授業前と授業後(単元前と単元後)の変容に、
授業目標(学習のねらい)に向かって、**主体的に学ぶ姿**があります。

※ 授業目標(学習のねらい)：○○の見方・考え方を働かせて、☆☆の活動を通して、□□の資質・能力を育成する

「何を学ぶか」
(教育課程の編成)

「内容」や「まとまり」の中で、3つの資質・能力の育成が図られ、
昨日の学びと今日の学びを結びつけながら、**自覚的に学ぶ姿**があります。

「どのように学ぶか」
(学習・指導の改善・充実)

自己の考えを広げ深める場面で、「見方・考え方」を働かせながら
試行錯誤する姿があります。 ※問いが生まれるサポートガイド「したい姿」参照(下欄)

※ やってみたい・調べてみたい・解決したい・整理したい・質問したい・説明したい・
～の場面でもやってみたい・もっと調べてみたい・もっと考えたい

「子供一人一人の発達をどのように支援するか」
(子供の発達を踏まえた指導)

共感的・受容的態度で友達と向き合い、教師と子供や子供同士の
適切なコミュニケーションを通して**学び合う姿**があります。

※ 適切なコミュニケーション・・・承認する声かけ・奨励する声かけ・賞賛する声かけ 等

「何が身に付いたか」
(学習評価の充実)

3つの観点から自己の学びや進捗の状況を捉え、
自ら学習を振り返って自分の言葉で**身に付いた学びを語る姿**があります。

「実施するために何が必要か」
(理念を実現するために)

学習内容を自分のものとして身につくよう、学習材・学習用具等を利用して
自分にふさわしい**学び方や分かり方を探す姿**があります。

他者と関わりながら、課題の解決に向かい「問い」が生まれる授業

単元・授業デザインMAP

～子供の3つの姿を目指して～

集団指導(ガイダンス)と個別支援(カウンセリング)の充実

○授業(単元)終了後に「何ができるようになるか」
3つの資質・能力を念頭に授業をデザインしましょう

○教材で「何を学ぶか」
本時の学習目標を明確にしましょう

主体的に「問い」をもち、
自分なりの考えを持つ姿



やってみよう
調べてみたい
解決したい

●準備

●導入

●展開

●終末

育成すべき資質・能力の三つの柱

知識・技能
(何を理解しているか、何ができるか)

思考力・判断力・表現力
(理解していること・できることをどう使うか)

学びに向かう力・人間性等
(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)

○授業(単元)後「何が身についたのか」
評価・改善を繰り返しましょう

○円滑に「実施するために何が必要か」
ノート・板書・ICT機器等を工夫しましょう

○本時・単元は「どのように学ぶか」
3つの姿に着目しましょう

他者との交流を通し、「問い」が生まれ
自分の考えを広げ深める姿



説明したい
質問したい
整理したい

学びの過程を振り返り、
新たな「問い」をもつ姿



もっと調べてみたい
～場面でもやってみよう
もっと考えたい

○多様な「子供一人一人の発達をどのように支援するか」
具体的な支援・手立て等を用意しましょう

支持的な風土・人間関係や環境を整える・生徒指導の4つのポイント

授業における基本事項

支持的風土・学習環境	
<input type="checkbox"/> 互いに認め合い、支え合う風土の醸成 <input type="checkbox"/> 学習環境(学習規律、言語環境、教室環境)の充実	「確かな学力」の向上には、支持的風土の醸成と学習規律等の学習環境を整えることが大切です。
授業マネジメント	
タイムマネジメント	
<input type="checkbox"/> 授業開始・終了時刻の徹底 <input type="checkbox"/> 簡潔な説明と的確な指示	簡潔・明瞭・的確な指示を行い、児童生徒が思考する時間を確保するなど、授業構成と時間配分を意識して授業を進めましょう。
めあて・まとめ・振り返り	
<input type="checkbox"/> 身に付けさせたい力を踏まえた「めあて」の設定・提示 <input type="checkbox"/> 「めあて」に正対した「まとめ」、「振り返り」の確実な実施	身に付けさせたい力を明確にした「めあて」を提示し「まとめ」、「振り返り」のある完結型の授業をめざしましょう。
発問	
<input type="checkbox"/> 学習のねらいに迫る意図的・計画的な発問 <input type="checkbox"/> 思考を広げ、深める発問の工夫	一問一答的な質問の繰り返しではなく、児童生徒の思考を広げ、深めるような意図的・計画的な発問を工夫しましょう。
思考力・判断力・表現力等	
<input type="checkbox"/> 課題について自分自身の考えをもつ時間の確保 <input type="checkbox"/> 学習のねらいの達成に向けた交流場面の設定	必然性のある交流場面で、自分の考えをもつた上で他者と交流することにより、思考を広げたり深めたりする言語活動を充実させましょう。
評価・改善	
<input type="checkbox"/> 授業の展開に生かす評価(児童生徒の学習状況の見取り) <input type="checkbox"/> 指導計画に基づく評価場面の設定と諸評価の確実な実施 (診断的評価・形成的評価・総括的評価等)	児童生徒にどのような力が身に付いたかという学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自ら学習を振り返って次の学習に向かえるようにしましょう。
板書・ノート、1人1台端末	
<input type="checkbox"/> 思考を整理し考えを深める構造的な板書・ノート指導 <input type="checkbox"/> 1人1台端末の日常的・効果的な活用	児童生徒が思考を整理し考えを深めるために、板書・ノートを運動させましょう。また、1人1台端末を日常的に活用しましょう。

令和4年3月一部改訂

単元プランシート

単元プランシート:

学校で育てたい資質・能力:

学校第	学年	【単元名】	(時間扱い)
-----	----	-------	--------

単元の目標:

(1).
(2).
(3).

単元の評価規準:

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

働かせる見方・考え方:

単元構想:

前単元:

目標	学習活動(□)と児童生徒の反応(○)	学習を支える教師の働きかけ	評価・改善点

後単元:

学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトⅡ

発行日
発行

令和5年3月改訂
沖縄県教育委員会

義務教育課学力向上推進室

〒900-8571 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号

TEL 098-866-2741 FAX 098-866-2750

ウェブサイト

<http://www.pref.okinawa.jp/edu/index.html>

(沖縄県教育委員会)
